106　江戸期刊行の出版書籍目録における鍼灸書について

木場由衣登
日本鍼灸研究会

現代日本の鍼灸の直接の源泉は，江戸期の鍼灸である．江戸期の鍼灸書（鍼灸法について書かれた書物だけではなく，経絡経穴や骨度を論じた書物，あるいは漢籍の医経類，明堂経脈類所属の書物を含む）は，刊本あるいは写本の形で数百種類伝存するが，刊本として広く流布した鍼灸書は，それだけ大きな影響力を持ち，また需要という面からも当時の鍼灸の様相を反映するはずである．ただ，刊本の全てが伝存しているわけではないし，伝存する刊本の全てが同等に影響を及ぼしたとも考えがたい．よって，刊行された鍼灸書総体の動向を把握することを目的として，江戸期に刊行された出版書籍目録に見られる鍼灸書の調査を行い，江戸期の鍼灸の変遷を考察した．

調査対象としたのは，慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』（井上書房，全4冊，1995年刊）に収録される寛文6年（1666）頃から明和9年（1772）までに刊行された12種の書籍目録である．これらに記載される医書の中から鍼灸書を抽出し，その傾向を分析した．なお，これらの書籍目録は古い目録を改修増補して編纂される傾向があるため，書名の誤記や省略がそのまま踏襲されることがあり，原書の書題と相違することも少なくない．また，鍼灸を含む医学に関する書籍は漢籍に分類され，これに注や訓を入れたものは全て別書として扱われている．したがって，書籍目録の記載だけでは，実際に印刷・販売された数を把握できない．しかし，繰り返し改訂される目録に幾度となく記載され，版の数の多い書物は，需要の高さと，当時の鍼灸に対する影響力の強さを物語っているはずである．

各目録に記載される鍼灸書の書目数を挙げると，寛文6年頃刊の『寛文無刊記書籍目録』所載の医書1431種のうち，鍼灸書と特定できるものは，『明堂灸経』『十四経発揮』の鈔や頭書，『鍼灸聚英』『銅人鍼灸』『甲乙経』『神応経』『鍼之書』など12種である．これに『素問』『霊枢』『難経』の素本，注解書など12種を入れると計24種，さらに「絵図（後に掛物）」として記載される『銅人形』『十四経図』を加えると26種となる．この後，寛文10年刊『増補書籍目録』では，鍼灸書には『経脈発揮』や『明堂灸経仮名』などが加わり16種となり，医経の注解書も『素問古註』『内経知要』などが追加されて，計32種となる．さらに寛文11年刊『増補書籍目録』では鍼灸書は同じく16種，ほかに『難経』関係として『難経正義翼註』が追加されている．延宝3年刊『古今書籍題林』では鍼灸書は17種（『内経』関係などを含めて計35種，以下同じ）であるが，元禄5年刊『広益書籍目録大全』で急に増加傾向となり，鍼灸書は38種（計61種）に達する．その後は減少傾向に転じ，元禄12年刊『新板増補書籍目録』では26種（計34種）となる．延宝3年には，いろは順の『増補書籍目録』が刊行され，この頃から鍼灸書は15種（計21種）と減少するが，その後ふたたび徐々に増加し，正徳5年刊『増益書籍目録大全』では41種（計56種）のピークを迎える．しかし，享保14年刊『新撰書籍目録』になると内容順の分類形式へと戻り，鍼灸書の数は10種（計14種），同書の宝暦4年版では6種（計12種），明和9年刊『大増書籍目録』では14種（計17種）に落ち込む．これは元禄期の好景気から一転して，享保以降の財政難が影響していると見られるが，享保期以降の鍼灸の衰退とも連動して見える．

江戸期の出版事情を知る手掛かりとしては，今回の書籍目録のほかにも，享保9年（1724）から文化11年（1814）の江戸における販売許可を記録した『割印帳』や，大坂の本屋仲間が板株を管理した記録である『板木総目録株帳』（寛政2年改正版）などがある．今後，これらと今回の調査を照合することで，より広く江戸期の鍼灸書の出版状況を調査したい．